

学校と地域をむすぶ

かけはし

大津市立葛川小中学校
地域コーディネーターだより
NO. 8
2018. 3. 26

かやぶきの家で昔を知る

小学校3・4年生は、「むかしのくらし」の学習でかやぶきの家に行きました。昔はどんな道具を使っていたのだろうか？昔はどんな生活をしていたのだろうか？と知りたいたことがたくさんありました。かやぶきの家の澤井栄子さんや坊村の高岸マス子さんと葛原かほりさんにお話を聞いて教えていただきました。

かやぶきの家に入り最初にやったのは、雨戸開けの仕事です。かぎの開け方を教えていただき、屋根雪で重たい雨戸を引っ張ります。雨戸を開けると太陽の光が差し込んできてとても明るくなりました。ひさしにぶら下がったつららがキラキラと光っています。とてもいい天気でしたがとても寒い朝。次はいろりの火をおこします。杉葉や木の枝を運んで火をつけます。今回はマッチで火をつけましたが、昔は火種を使って火をおこしたそうです。火が消えないように、しっかり燃えるように薪をくべていきます。だんだん火が大きくなってきて、いろりのまわりに座しているととても温かくなってきました。火を囲んで座していると体だけでなく、心も温かくなり、なごやかな雰囲気になります。昔の話がたくさん聞かせていただきました。「朝一番のお母さんの仕事をまずは火をおこすこと。



火がなければ何もできないからねえ」「昔はこんなことしながらよなべしてたんやよ」「山に仕事に行く時には丈夫な麻のもんぺをはいていったんだよ」「川ではこんな道具で魚やうなぎを採ったよ」など。昔は、工夫して道具を作ったり、身の回りにあるものを採って食べたり、家族みんなが役割を分担して仕事をしたりしていたことがわかりました。いろりを囲んで話はずきません。いろりの火の煙も天井に向かってどんどん上がっています。この煙が茅の中の虫を退治する力を持っていることも知りました。昔はいろりの上でおかいこさんを飼っていて、その繭から絹糸を紡いでいたことも教えていただきました。「かやぶきの家はいつごろできたのですか？」「もう200年以上も昔のものらしく、まだお侍さんのいた時代だね」そんな昔の家がこのように残っていることがすごいなあと思いました。手作りのお手玉やあやとり、おはじきを持ってきてくださり、「こんな遊びをしていたよ」と教えていただきました。小学校の時には分校に通ってい

たこと、毎日歩いて学校に通っていたので足が丈夫で、特に平の人は走るのが速かったこと、運動場にはさつまいもが植えてあったこと。「戦争の頃は食べるものがなかったから、おいもとかを食べていたんだよ」と。ドッジボールをして遊んでいたお話には「今と同じやあ」とびっくりしました。

次は、掃除体験です。「はたき」はどうやって使うの？教えていただきました。ふき掃除をするために、いろりの火にかけた「てんどり」の中のお湯をひしゃくですくって



バケツに入れました。かたくしぼった雑巾で押し入れの木の戸を拭きました。こするとピカピカになりました。いろりのまわりにはたくさんのすすが飛んでいます。ほうきで掃いて、ぞうきんで拭きました。「一休さん拭きがいいよ」と教えてもらい、行ったり来たり何度も拭きます。すぐにぞうきんが真っ黒になりました。

最後は、火鉢の上でお餅を焼きました。網の上のお餅が少しずつ膨らんでくると、香ばしいにおいがただよってきました。焼けたお餅はまずはおばあちゃんたちに食べてもらいました。火鉢の中の炭で焼いたお餅は、焦げ目の付き具合も香ばしさも抜群で、おいしくいただきました。

たくさんお話を聞かせていただき、昔の生活が目にかんできました。火を使った生活、手を使った仕事、自然の恵みをいただく食事、工夫して作った道具など、昔の人々の知恵がたくさん詰まっていることを知りました。また、今はスイッチ一つで明かりがついたり、蛇口をひねるとすぐに水が出てきたり、とても便利な生活になっているなあと思いました。「こんなことをしていたよ」と経験されてこられたこととお話いただいた高岸さんや葛原さん、そして、かやぶきの家のつくりや道具を教えていただいた澤井さん、ありがとうございました。

戦争のころのお話

小学校5・6年生は、戦争の頃のお話を聞きました。

5・6年生は、秋に広島方面に修学旅行に行き、戦争のもたらした悲惨さを感じて帰ってきました。しかし、「もっと身近な所ではどうだったのだろう？」と新たな疑問が出てきました。戦争の時代を実際に体験された方々のお話を是非聞かせていただきたいという子どもたちの強い気持ちがあり、吉澤弘さん、奥村千代さん、小西達雄さんのお話を聞かせていただくことになりました。

「どんな生活をしていたのですか？」と聞くと、「食べるものがなかった」「おなかをふくらませるためにいもをお粥に入れて食べた」「学校の運動場はいも畑だった」「お金があっても切符がなければ物を買うことができなかつ



た」というお話。「戦争のために物を作る」「鉄でできているものは全部出す」「お寺の釣り鐘まで持って行かれた」とすべて戦争のためだったこと。「B29が飛んでくると空襲警報が鳴る。家のあかりがもれないように電気の傘の上に黒いきれをかぶせる」これは子どもにも教えられていたというお話。軍事工場で働いていたこと、命令をもらった後の終戦、子どもたちを育てるために必死になったことなど。「戦争はしたらあかん」「戦争の頃の楽しい思い出はない」というお言葉が心にひびきました。それぞれの方が経験されたことを聞かせていただき、何でも手に入れることのできる今の世の中のありがたさを感じるとともに、二度と戦争はおこしてはいけなと強く思いました。お話を聞かせていただき学んだことは、発表会を持って、自分たちの思いを交えながら、下学年の人たちにも伝えることができました。貴重なお話を聞かせていただきありがとうございました。

陶芸の技を学ぶ

小学校5・6年生が陶芸家の川瀬竹秋さんから技を学びました。「心にのこる自分だけのものを作ろう」をテーマに、ペン立てやマグカップを焼き物で作ることを教えていただきました。まずは土粘土をこねるところを見せていただきました。見る見るうちに粘土はやわらかくこねられ丸められていきましたが、「土もみ3年」と言われるように、土をこねるだけでもかなりの修行が必要なのだそうです。同じ厚さにスライスした粘土を空き缶に巻き付ける。へらで模様を入れたり飾りを貼り付ける。その作業を目を凝らして真剣に見つめる子どもたち。その手の動きに感動。「じゃあやってみよう」。



まずは、粘土をスライスするところから。慎重に手を動かします。粘土を空き缶に巻き付けると作りたい物がだんだん頭に浮かんできました。お手本を見ている時には簡単そうに思えましたが、実際にやってみるととても難しく時間がかかりました。いよいよ模様付け。ここはオリジナル色を発揮するところです。「どんな模様を描こうかなあ」

「これを貼り付けよう」。思いはどんどん広がります。「持ち手もつけてみたいなあ」。時間はかかりましたが、心をこめていねいに作業に取り組みました。そして改めて川瀬さんのプロの技のすごさに感動。焼きあげていただくのを楽しみに待つことになりました。そして、先日、焼き上がった作品を届けていただきました。世界にたった一つの自分だけのペン立てやマグカップを手に取り、とてもうれしくなりました。大切に使用したいと思います。一人ひとりにていねいに教えていただき、すてきな焼き物を仕上げてください、ありがとうございました。

地域の伝統を守り続ける

3・4年生は「伝統を守り続ける」という社会科の学習で、地域に残されている伝統的な行事について調べました。その中でも、葛川に古くから伝わる「太鼓まわし」のお祭りについて詳しく調べてみることになりました。毎年7月18日に明王院で行われている「太鼓まわし」を間近に見たり、お祭り前に小中学校全員で明王院や地主神社の掃除をしたりするなど、「太鼓まわし」をととても身近なものに感じている子どもたち。知りたいことがたくさんありました。そのお祭りがいつから続いているのか？どんないわれがあるのか？なぜずっと続いているのか？そしてこのお祭りをを行うためにどんな人たちが力を出しているのか？DVDや本を見てわかったこともありました。もっと知りたいことがたくさん出てきて、実際にお祭りに関わっておられる、葛川民芸保存会会長の上谷宏隆さんに尋ねてみることにしました。たくさん質問に丁寧に答えていただき、疑問は解決されていきました。お祭りを運営していくことは大変なこと。しかし、古くから受け継がれてきたこの「太鼓まわし」を伝え続けていきたいという強い思いを感じることができました。今年の「太鼓まわし」のお祭りは、今までとはまた違った思いを持って見に行くことができそうです。

今年度も、地域コーディネーターだより「かけはし」を読んでいただきありがとうございました。「かけはし」も5年目を終えることになりました。改めて、地域のみなさま方に葛川小中学校の子どもたちがお世話になり、力になっていただいていることを感じています。

地域の様子を知ることができました。地域が変わってきたところや変わらず守り続けられているところを見いだすことができました。地域の自然や人々とふれあい親しみが増してきました。仕事に対する思いや生き方を学ぶことができました。学校の中だけでは学ぶことのできないことや教科書には載っていないことなど、地域の中で、地域の方から、地域のことをたくさん教えていただきました。

地域のみなさま方、ありがとうございました。そして、これからもよろしくお願いたします。